



野生生物に囲まれる日々

田中 淳志

2005年4月より環境省自然環境局野生生物課（以下、野生課）に勤務して、はや1年が過ぎました。この1年間、環境省内部での仕事についていろいろと勉強させていただきましたが、一方で、普段在籍する野生課という一原課での業務など、ちっぽけなものです。自然環境局内の原課は、世界遺産や自然再生を担当する自然環境計画課、自然公園の保護や整備などを担当する国立公園課と野生課があり、野生課では、有害鳥獣を含む鳥獣の管理行政、外来生物対策、遺伝子組み換え生物対策、国際的な野生生物保護に関する協力活動などがあり、私は、絶滅のおそれのある野生生物の保存を担当する仕事をしており、レッドデータブックの改訂や、種の保存法に指定された国内希少野生動植物の、国内各地での保護活動の事業内容の立案や事業実施のための契約書作成等の事務作業、また一般の方からの、希少な野生動植物に関する問い合わせの対応などを行っています。

希少な野生動植物といえば、何をイメージするでしょうか。野生生物課でいま力を入れているものには、トキやヤンバルクイナ、ツシマヤマネコなどがあります。トキについては、日本産のものが絶滅してしまいましたが、ヤンバルクイナとツシマヤマネコについても、現状のペースで生息数の減少が続いた場合、絶滅することが近い将来には見えています。その原因は、生息地の開発や、自動車事故、ヤンバルクイナの場合はマングースによる捕食などがあげられ、これらの絶滅因子を取り除くことが仕事の一つとなります。政策研究所で、多面的機能評価のプロジェクト

に関わっているときには、農地等に生息する野生生物の社会での価値をシビアに算出し、その価値によって保全の意味づけを行なうことを求められましたが、ここではより単純に、野生生物の生息数・生息環境を保全することは、それ自体が重要なことであるとして、WhyやHow muchなどの視点はありません。

それはさておき、環境省といえば最近、いくつかのパフォーマンスが取り上げられることが多く、読者の皆様も、環境省といえば思い浮かぶ人物や、フレーズがあるのではないのでしょうか。

思い浮かぶものの中に、地球温暖化対策の一連のものが挙げられるはずです。ウォームビズ、クールビズなどは特にご存知のはずです。職場によっては、夏にセーターが必要な昨今、取り組みを進めることに賛同が得られ、この活動とネーミングが浸透することになりました。またさらに、平成17年2月に発効した京都議定書の約束、「日本は温室効果ガス排出量を2008年～2012年の間には、1990年比で6%削減する」を守るため、六つのアクションプランを含んだ「チーム・マイナス6%」が発表され、メンバーがいつのまにか20万人を越えてしまいました。その中では、「過剰包装を断ろう」とのアクションプランの下、ゴリエデザインの「ゴリエもったいない風呂敷」、さらに、秋葉原からは「Myメイドバック」や「うち水っ娘」まで登場し、大変、大変、盛り上がっています（加えて、環境省窓口へのメールアドレスがMOE@で始まることを知っている人は、周りから冷たい視線を浴びるかもしれません）。

環境を保全する仕事に純粹に関われるという、貴重な体験を感じながら、日々を過ごしています。